

## I. 研究報告

### NACAC(National Association for College Admission Counseling) Conference 2022 参加報告

高大接続研究センター研究員  
名古屋経済大学特任教授・全学教育推進センター長  
大谷 尚

#### 1. はじめに

2022 年 9 月 21 日-24 日 に米国ヒューストンで開催された NACAC(National Association for College Admission Counseling) Conference 2022 に参加したので以下に報告する。本稿の構成は次の通りである。

1. はじめに
2. NACAC について
3. 今回の参加までの経緯
4. 今回の参加の主たる目的
5. 今回の NACAC Conference 2022 の会場と開催内容
6. 専用スマホ・アプリとパソコン経由の WEB サイトでの参加スケジュール管理
7. 初参加者のためのセッションと開会行事等
8. SIG (Special Interest Group) ミーティングの日程とトピック
9. 教育セッションの日程とトピック
10. NACAC 倫理綱領の 2019 年の変更について
11. test-optional 化の動きについて
12. ダイレクト・アドミット direct admit について
13. おわりに

なお、筆者自身が同様のものを読んだとき、原語が知りたくなることが多いため、本稿では報告としての資料性を重視し、原語も可能な限り添える。

本調査は、名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究倫理委員会から、2016 年 6 月 17 日付で承認され(承認番号 16-764)、その後、研究組織の変更に伴って 2020 年 1 月 14 日付けで再承認された(承認番号 19-1378)「高大接続型学力の内容とその獲得過程の質的・探索的解明」の一部として実施している。

#### 2. NACAC について

NACAC とは、National Association for College Admission Counseling であり、米国の大学進学のための大学側の専門職員と高校側の進学指導専門職員(あるいは教員)、そして大学にも高校にも

属さない組織や個人たちによって構成される専門職団体である。後述するが、この団体は単なる専門職の情報交換や経験交流のためのものではなく、この団体が、全米の大学の統一的な出願手続き、出願期日、入学手続きなどについて決めており、各大学や高校はそれに従う。

NACAC の構成員は次の通りである。

・機関会員 Institutional Member

- 米国内の大学と米国内で学生募集を行う米国外の大学
- 米国内の高校と米国内の大学に出願者を送る米国外の高校

・独立教育コンサルタント Independent Educational Consultant

- 大学にも高校にも属さずに高校生の大学出願・進学を支援する個人または組織

・組織会員 Organizational Member

- 大学進学関係の NPO 等<sup>1</sup>

・個人会員 Individual Member

- この問題・課題に関心を有する個人

日本とは異なり、米国大学の入学者選抜の枠組や具体的手続きについての多くの事柄は、上記のようにこの NACAC が決めている。一例を挙げると米国では、合格した出願者の入学手続きの最終日は全て 5 月 1 日と決まっていて、この日付は National Candidate Reply Date と呼ばれている。そのため日本のような、いわゆる「すべりどめ」の大学に入学金を払い込んでおくという必要がない。この National Candidate Reply Date を決めているのも NACAC である。つまり、米国大学の統一的な募集・出願・合否判定・入学勧誘・入学手続きを合意の上で定めてきたのが NACAC である。

ところで、日本と違って米国には、地域に根ざしたきわめて小さいカレッジで、その地域内でしか学生募集をしていないところがあるが、そのような大学は NACAC に加盟していないことがある<sup>2</sup>。たとえば、全米最小規模のリベラルアーツカレッジである Thomas More College of Liberal Arts は 1 学年 90 人、Logan University は 1 学年 98 人であり、日本の 1 学年 2 学級から 3 学級の高校程度の規模しかないが、この両大学は NACAC の機関会員になっていない。しかも、保健・理工系なら、米国にはさらに小規模の大学があり、California Institute of Integral Studies は 1 学年 50 人、San Francisco Bay University (2021 までの名称は Northwestern Polytechnic University) は 1 学年 52 人だが、この両大学も NACAC の機関会員になっていない。

しかしそのような大学以外の、全米規模で学生募集を行う大学は、すべて NACAC の会員になっている。また、米国で学生募集を行う海外の大学も機関会員になっている (たとえば The American

---

<sup>1</sup> たとえば米国には、National Center for Fair & Open Testing (通称 Fair Test) という名称の、テストの公正利用を研究しそれを働きかける団体があり、この団体の Executive Officer が、今回の教育セッションの D12. The Future of ACT/SAT-Optional and Test-Blind/Score-Free Admission (9 月 23 日 13:15-14:15) のコーディネータとスピーカーの 1 人だったが、この団体も NACAC の組織会員である。

<sup>2</sup> The Complete List of Smallest Colleges in the United States <https://testprepkart.com/sat/blog-single.php?id=773/the-complete-list-of-smallest-colleges-in-the-united-states>

University of Paris, Brunel University London, Imperial College London, Bard College Berlin: A Liberal Arts University)も機関会員になっている。日本からもいくつかの大学(たとえば International College of Liberal Arts (iCLA)、山梨学院大学、名古屋大学(英語で履修できる G30 プログラムがあるため)、立命館アジア太平洋大学、早稲田大学等)が機関会員になっている。

また、このような全米で学生募集を行う大学に生徒を出願させる多くの高校が機関会員になっていて、米国外にある高校も機関会員になっている。

### 3. 今回の参加までの経緯

NACAC Conference には、2017 年のボストンでの開催の時に初めて参加し、今回の参加はそれ以来になる。2017 年の参加の報告は大谷(2018)に記したので、本稿の読者にはぜひそちらを先に読んで頂きたい。

筆者にとってのその参加は、その前年度末に実施したマサチューセッツ州の 4 大学(UMass Amherst, MIT, Amherst College, Hampshire College)のアドミッション・オフィスの調査(大谷・依田、2018)に続く調査のために行った。その後、テキサス州ダラスで開催された米国の大学進学独立カウンセラー協会の年次会合 HECA (Higher Education Consultants Association) Conference 2018 への参加(大谷、2019)、同じくダラスで開催された AACRAO (American Association of Collegiate Registrars and Admissions Officers)による SEM (Strategic Enrollment Management) 年次カンファレンスへの参加(大谷、2020)を行い、情報収集と報告を継続してきた。そしてその後「科研基盤(C)ポスト高大接続改革を見据え『高大接続型学力』の特質と形成環境を解明する質的研究 2020-2022」の助成を得たため、さらに調査を拡大する計画であった。

しかし 2019 年末からの新型コロナウイルス感染症のパンデミックのために、2020 年の前半に参加を予定していた AACRAO Annual Meeting 2020 は中止となった。これは急な中止であったため、AACRAO は年内にこれをオンライン開催することができず、2020 の Annual Meeting は中止となり、AACRAO Annual Meeting は翌 2021 年に完全オンラインの Virtual Meeting として 6/19-6/22 の 4 日間で開催された。そのため筆者はこれにオンラインで参加した。

しかしこの参加には大きな問題があった。以下は個人的な体験となるが、今後、新型コロナウイルス感染症が一定に収束しても、しばらくの間、バーチャル開催が並行して行われることは考えられるので、同様の可能性を考える読者のためにあえて記しておく。

これはまずアメリカ時間で開催されるため、日本から参加すれば、開催期間中は完全に昼夜逆転で生活することになる。仮に通常通り現地に行けば、往路の機内での照明の点灯の仕方や食事の提供時間などによって、現地の時間帯に体調を合わせていくことになるが、日本からのオンライン参加だとそれがまったくできない。また現地なら太陽の光を受ける昼の時間に活動し、その光の無い夜の時間に睡眠を取ることになるが、上記の通り、オンライン参加だとそれが逆転してしまう。また、家族がいれば家族とも逆転した生活を送ることになる。このことは予想はしていたが、現実には予想を超えて大変だった。

また、全く予想していなかったこともあった。たとえば、通常の対面のカンファレンスで設定される

昼食休憩時間というものが、まったく設定されなかった。考えてみれば、完全オンライン開催には「開催地」というものが無いので、依拠すべき時間帯が無い。たとえば昼食時間だが、米国には4つのタイムゾーンがあるため、どれかひとつに合わせて昼食時間を設定しても意味がない。通常の対面でのカンファレンスの昼食休憩時間の設定は、参加者全員がそこに集まっているからこそ必要であるし可能なのである。しかしオンラインでは共通の時間がなく、参加者の現地時間はばらばらである。そのため、昼食のための休憩時間を設定することにはあまり意味がない。もともと、完全オンラインなのだから、誰でもいつでも食事を取りながら参加することが可能である。その意味でこれは非常に合理的だとも考えられる。しかし少なくとも米国からの参加なら大きな無理はないと思われるが、日本からの参加はきわめて大変だった。正直なところ、ただパソコンの前に座っている受動的な姿勢で、昼夜逆転の時差のために少なからずぼーとした状態のまま、パソコンの画面を眺めて全日程が終わってしまった感じさえた<sup>3</sup>。

しかしいちばん問題だったのは、参加者からの直接の情報収集ができないことであった。このようなカンファレンスでは、さまざまな参加者と知り合って、日本に居ては得られない生の情報を得られるところに意味がある。たとえば上述の AACRAO Annual Meeting のスローガンは、「Learn. Network. Advance.」である。これらはすべて動詞というよりむしろ命令文であって、Network. は、「人間関係を創って広げろ」という意味であろう。また、サブスローガンのひとつに「Building Pipelines」とあるが、これも同様の意味だと理解できる。このようにカンファレンスでは、参加者同士が知り合って情報ネットワークを形成することが大事である。そして対面であれば、たとえばあるセッションで自分が関心のある発言をした人に、そのセッションの後で話しかけてさらに情報を得たり、そのセッションのコーディネータ・司会者からさらに情報を得たりすることができ、そのようなことがこれまでも非常に有益であって、上記の報告書にはそれらをいくつも記している<sup>4</sup>が、オンライン参加ではそれが全くできない。

それでも今回も、当初はオンライン参加の可能性しかないと考えていた。それは、新型コロナ感染症に対する日本の「水際対策」のために、帰国便に搭乗する際に、搭乗前72時間以内のPCR検査結果の陰性証明書の提出が必要とされていたためであった。搭乗前72時間以内というのはカンファレンス会期中であるため、カンファレンスに参加しながらPCR検査を受けに行くのはほぼ不可能である。これについては、感染症と旅行医学を専門とする研究者に相談し、現実的な唯一の方法は、カンファレンス終了後、その日の内に空港に移動し、そこで検査を受けて空港周辺のホテルで一泊し、翌朝に検査結果を入手して帰国便に搭乗するということであった。しかしそこで陰性証明が得られれば良いが、陽性になっていたら2週間ほど帰国できなくなり、業務に多大な支障を来

---

<sup>3</sup> ただし、乳児を抱えながら参加していた参加者も居て、オンライン開催にはそのようなメリットがあることは十分に感じた。

<sup>4</sup> たとえば、大谷(2019)に記した、ある出願者に合格通知をしたところ、他大学にも合格していてそちらに進学すると回答した出願者の保護者に、では当大学は奨学金を検討するからその決定は待って欲しいと伝える際に、そちらの大学の合格通知を見せてくれと要求するかどうかという点などは直接にアドミッション・オフィサーから情報を得た。日本なら、証拠書類無しに奨学金の提供をすることは無いと考えられるが、米国ではこの要求は通常はしないという回答を得ている。

すため、これも選択できなかった。そのため、対面参加はほぼ諦め、オンライン参加を考えていた。上記のように日本からのオンライン参加には、いわば懲りていたのだが、それしか現実的な参加方法が無いと考えられた。

しかしながら幸いなことに、2022年9月6日から帰国便搭乗前72時間以内のPCR検査陰性証明書の提示という条件が撤廃された。そのため急遽、対面参加することにしたのであった<sup>5</sup>。

#### 4. 今回の参加の主たる目的:NACACの倫理綱領の2019年の変更についての調査とtest-optional化についての調査

今回の参加の目的は、米国の大学の入学者選抜の変化について調査することであった。この変化とは、主に次の2つである。

第1は、「NACACの倫理綱領の2019年の変更」であった。そしてこれは、後述のように対面でなければ調査できないものであった。

第2は、高校生が受けるSATとACTという全米共通の学力テストの結果を、大学への出願の際に提出しなくて良いという「test-optional化の動き」であった。そもそも以前から、この方向性が出ていて、共通テスト利用を必要とする日本の国公立大学受験とは異なる状況にあるため、筆者はこれに大いに関心があった。しかし近年、test-optionalにする大学が急激に増えているため、最新の動向を知りたかった。ただしこの問題は第1の点とは異なり、セッションのトピックになっているので、個人的に口頭で調査しなくても、それをトピックとするセッションに参加することで最新の情報を得ようと考えた。

これらの点についてのこれまでの調査の経緯と今回の調査結果は後述することにして、以下ではまず、今回のカンファレンスの全体について解説する。

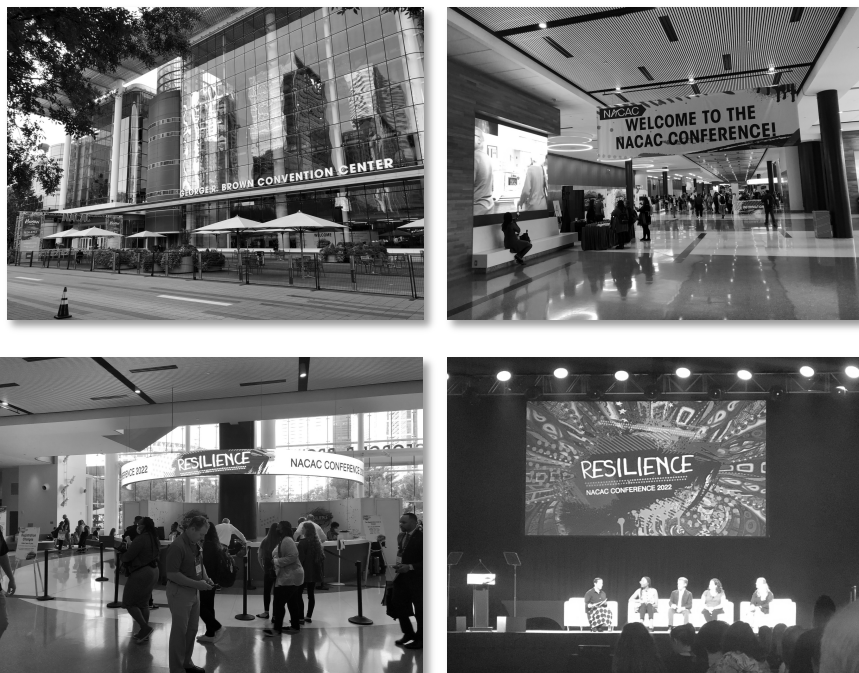
#### 5. 今回の NACAC Conference 2022 の会場と開催内容

今回の会場はヒューストンのジョージ・R・ブラウン・コンベンションセンターである。このコンベンションセンターは幅約100m、長さ約500メートル、5階建ての非常に大きな施設であり、北東の端近くと南東の端近くの北西側、つまり正面がそれぞれ2つの大きなホテル、Marriott Marquis HoustonとHilton Americas Houstonに2階と3階で接続している。21日の早朝の会合のうちのいくつかは、このMarriott Marquis Houstonホテルで開催されていた。この広い会場のあちこちでセッションや展示などがなされるため、このセンターから全く出なくても1日で1万歩ほどを歩いていたことがス

---

<sup>5</sup> 今回参加して感じたこのカンファレンスの雰囲気は2017とはかなり違っていた。たとえば大学側の1人のアドミッション・オフィサーは、100から130くらいの高校を回り、その高校の複数のカレッジ・カウンセラーと話をするので、1人が300-390人くらいのカレッジ・カウンセラーを知っていることになる。2017のカンファレンスでは、そのためか、あちこちでハグの嵐が吹き荒れていた。しかし今回は、新型コロナウイルス感染症のためと思われるが、さすがにハグはほとんど見なかった。これは今回のカンファレンスだけでなく、新型コロナウイルス感染症によって、米国の「ハグ文化」が一時的に停止しているのであろうと推察された。

マホの万歩計の計測で分かったほどである<sup>6</sup>。



NACAC Conference 2022 の会場とコンカレント・セッションの様子(筆者撮影)

今回のカンファレンスは、上記のように9月21日(水曜)から9月24日(土曜)まで行われた。まずその日程を大まかに記す。時間に下線の引いてあるものは、メインステージで行われるコンカレント・セッションであり、それ以外は並行して複数のセッションが走っている。

なお、2017年にNACACカンファレンスに参加したときは、(1)役員、歴代会長、各地区の代表者などのための会合、(2)全体会や初参加者(first timer)のためのオリエンテーション、(3)一般セッション、(4)教育セッション(Educational Session)、(5)SIG(Special Interest Group)、(6)展示、(7)有料のプレカンファレンス・セミナーやワークショップ、(8)レセプション、(9)キャンパス・ツアーがあり、大谷(2018)にそのように記したが、今回は、このうち(3)一般セッションは設定されなかった。以下にプログ

<sup>6</sup> しかし移動が大きかったその理由のひとつは会場の掲示の不備である。たとえば、セッションのために370Dという部屋に行こうとしても、天井や壁には、370A-370Cはこちらだという掲示はあるが370Dがどこかを示す掲示は無い。つまり370Dは存在しないように見える。しかしながら皆、その部屋はどこかにあるのだろうと思って、370A、370B、370Cと歩き、突き当たりの廊下をぐるりと回って、ドアにだけ370Dと示されている部屋を発見してそこに入ることになる。しかしそれなら、370A-370Cの前を歩くより反対側に回り込んだ方がずっと早い。そのことに気づいて、次の機会にそちらから回っても、やはり370Dはこちらだという掲示は無い。廊下に表示がないことから、どうも370Dは当初は存在せず後から設定された部屋なのではないかと考えられる。しかも、プログラムのアプリでは、370という区画を示すマップは出るが、A、B、C、Dは示されない。同様なことがいくつかあって参加者たちは不満を漏らしていた。こういったことが改善(Kaizen)されないのがアメリカらしいと感じた。

ラム全体を示す。なお、下記の内、時間に下線のあるイベントは、メインステージでのコンカレントセッションである。

### 9月21日(水)

終日プレカンファレンス・セミナー/ワークショップ(別料金)とNACACや関連団体の役員会合等

### 9月22日(木)

- 07:00-10:00 プレカンファレンス・ワークショップ(別料金)
- 07:15-10:15 プレカンファレンス・セミナー(別料金)
- 09:00-10:15 初参加の参加者のためのオリエンテーション First Timers' Orientation
- 11:00-12:15 ビリー・ポーターとの会話 A Conversation with Billy Porter
- 12:45-13:45 教育セッションAブロック
- 14:15-15:15 教育セッションBブロック
- 15:45-16:45 SIG (Special Interest Group) ミーティング

### 9月23日(金)

- 08:30-10:00 危機の時代におけるレジリエンス：公立学校の進学指導担当者と大学への経路  
Resilience in a Time of Crisis: Public School Counselors and the College Pipeline
- 10:30-11:30 教育セッションCブロック
- 12:00-13:00 SIG (Special Interest Group) ミーティング
- 13:15-14:15 教育セッションDブロック
- 14:30-15:30 ヘッドラインを超えて：大学入学者選抜を扱うジャーナリストの洞察から  
Beyond the Headlines: Insights from Journalists Covering College Admission
- 16:00-18:00 カウンセラーズ・カレッジ・フェア Counselors College Fair (CCF)

### 9月24日(土)

- 08:00-09:00 本会の現状／会員年次総会 State of the Association Update/Annual Membership Meeting
- 09:30-10:30 教育セッションEブロック
- 11:00-12:00 教育セッションFブロック
- 12:30-13:30 教育セッションGブロック
- 14:00-15:30 終了メインステージ「大学入学者選抜における人種と文化について」レナード・ムーア博士 Closing Main Stage Dr. Leonard Moore on Race and Culture in College Admission

これ以外にラーニング・ラウンジという小さなステージで、30 分のセッションがいくつも開催される。これらだけで 148 設定されている。また、1 階の広大な展示ホールでは、企業や大学や教育関係の NPO などのたくさんのブースが設置されて展示が行われる。また、これに加えて Career or Global Hub という名称の、参加者の専門職的発達のためのセッションが開催される。さらに Solution Showcases という名称で、大学進学やさまざまなトレーニングのためのパソコンやスマホのアプリ (solution) の紹介のセッションが展示ホールで行われる。

また、23 日の 16:00-18:00 のカウンセラーズ・カレッジ・フェアとは、この大会に参加したほぼ全ての大学のアドミッション・オフィサー (カウンセラー)らが一斉に自大学のブースを出して、自大学の紹介をするものである。北米以外からの参加大学もブースを出しており、あまりに多くて 2 時間では回り切れない程である<sup>7</sup>。

## 6. 専用スマホ・アプリとパソコン経由の WEB サイトでの参加スケジュール管理

このカンファレンスでは、印刷された冊子体のプログラムは一切用意されない。そのかわり、スマホ用のアプリと、それと参加者 ID で連動してパソコンから閲覧と操作ができる WEB サイトへのアクセスが提供される。

このアプリには、全セッションの解説、セッションの開催場所のホール内のマップ、全参加者のリストが含まれていて、それらを検索できる。それだけでなく、このカンファレンスの参加者は、まず、どのようなトピックに関心があるかを登録する<sup>8</sup>ののだが、その情報に基づいて、参加者の関心に応じたセッションへの参加をこのアプリが提案してくれる。具体的には、プログラムの各セッションのタイトルを一覧した時にタイトルの後に、参加を促す **Recommended** が表示される。).

その上で、参加者は参加したいセッションを決めて登録する。そうするとそのセッションの開始前に、「もうすぐそのセッションが始まりますよ」というメッセージが来る。セッションの概要やセッションのコーディネータとスピーカーの所属・職・氏名もすべてアプリで分かる。ただし、当日使用したスライドはここからは取得できない。使用されたスライドは参加中には配布されず、カンファレンス終了後にカンファレンスのサイトからダウンロードできることになっていて、ちょうど本稿執筆中の現在、それらがダウンロードできているし多くのセッションの動画も見ることができている。そのため、スライドを早く入手したい参加者は、セッション中にスマホでスライドを撮影していた。

なお、このアプリを通して他の参加者とのチャットや、参加者との対面での面会の申し込みなどできる。面会は、双方が空いている時間を考慮してアプリが提案する。参加者のリストには顔写真を登録することもできる。これらすべてがスマホでもパソコンでも同じようにでき、設定・登録した情報

<sup>7</sup> 日本からは、立命館アジア太平洋大学がブースを出していた。

<sup>8</sup> それ以外に、ハンディキャップの有無などを登録する。筆者が参加したあるセッションでは、2 人の手話通訳者が交替で通訳をしていたが、聴覚に障害があると申し出れば参加するセッションに手話通訳を付けてくれるものと思われる。また、LGBTQIA+に対応し、どのような人称代名詞で呼ばれることを希望するか (She/Her/Her、He/Him/His、They/Them/Their (単数扱いの they) その他) も登録する。希望する人称代名詞は名札に記されて明示される。



は同期し、両方が常に同じ状態になっている。また、各セッションの評価もすべてこのアプリでできる。

## 7. 初参加者のためのセッションと開会行事等

21 日の 9:00-10:15 の First Timers' Orientation は初めてこのカンファレンスに参加する人のための大きなセッションである。筆者は上記のように 2017 年にも参加しており今回が初めてではなかったが、これに参加した。司会者の「自分が NACAC Conference の First Timers' Orientation に参加したのはもう 14 年前だが、その時から自分の仕事と人生とが変わったのです！」ということばが非常に印象的だった。

その後 11:00-12:15 にメインステージで開会行事が行われた。そこでは、ゲストであり、エミー賞・トニー賞・グラミー賞受賞者でゴールデングローブ賞にノミネートされた俳優、歌手、作家であるビリー・ポーター氏と司会との対談があった。しかし対談というより、実質的にはビリー・ポーター氏のきわめてエネルギッシュな講演であった。彼は用意された椅子から立ち上がり、ステージ上を歩き回って体全体で表現しながら参加者に熱く語りかけた。

以下には、広範なセッションのうち、SIG ミーティングと、このカンファレンスの中心とも言うべき教育セッションの全てについて紹介する。それらのトピックを見るだけでも、このカンファレンスの先進性と包括性、そして社会的公正や社会正義を強く志向する NACAC とそのカンファレンスの特性や姿勢が読み取れると思われるので、それらは敢えてすべて訳すことを試みる。

## 8. SIG (Special Interest Group) ミーティングの日程とトピック

SIG は 2 つの時間帯に分かれてそれぞれ次のミーティングが開催される。つまり一人の人間は 22 日 15:45-16:45 と 23 日 12:00-13:00 の 2 つの SIG ミーティングに参加できる。これらの中には、筆者が 2017 年にボストンで参加した NACAC カンファレンス 2017 (大谷、2018) の時と同じもの (公立学校カウンセラー SIG、私立学校カウンセラー SIG、カトリック校カウンセラー SIG、国際バカロレア校 SIG など) があるが、全く新しいもの (ラーニング・ディファレンス SIG など) もある。また表現や範囲が広がったもの (African American から Black and African Diaspora へ等) もある。

### SIG ミーティング 22 日 15:45-16:45

- ◆ 公立学校カウンセラー Public School Counselor SIG ミーティング
- ◆ ACAC カレッジフェアコーディネータ<sup>9</sup> ACAC College Fair Coordinators SIG ミーティング
- ◆ アジア系アメリカ人と太平洋諸島住民 Asian American and Pacific Islander SIG ミーティング

---

<sup>9</sup> ACAC は NACAC から N(National) を抜いたものであり NACAC の各州の組織を指している。

- ◆ Black<sup>10</sup>とアフリカ人のディアスポラ Black and African Diaspora SIG ミーティング
- ◆ コミュニティカレッジ/転入学 Community College/Transfer SIG ミーティング
- ◆ 国際バカロレア International Baccalaureate SIG ミーティング
- ◆ 学習差異<sup>11</sup> Learning Difference SIG ミーティング
- ◆ LGBTQ+とアライ<sup>12</sup> LGBTQ+ & Allies SIG ミーティング
- ◆ 地域担当アドミッション・カウンセラー<sup>13</sup> Regional Admission Counselors SIG ミーティング

## SIG ミーティング 23 日 12:00-13:00

- ◆ カトリック教育者 Catholic Educators SIG ミーティング
- ◆ コミュニティ基盤型組織 Community Based Organization SIG ミーティング
- ◆ フランスのバカロレア French Baccalaureate SIG ミーティング
- ◆ 独立教育コンサルタント IEC-Independent Educational Consultants SIG ミーティング
- ◆ ユダヤ系学校とユダヤ人生徒・学生 Jewish Schools and Jewish Students SIG ミーティング
- ◆ ラテン系/ヒスパニック系 Latinx/Hispanic SIG ミーティング
- ◆ 私立学校カウンセラー Private School Counselors SIG ミーティング
- ◆ 郊外と小さな町 Rural & Small Town SIG ミーティング
- ◆ アドミッションにおける女性 Women in Admission SIG ミーティング

2017 年のときは筆者が参加した複数の SIG ミーティングではプレゼンテーションは行われず、一人あるいは複数の司会者の進行で、全員がフロアで情報提供や話し合いをしていた。今回は SIG の時間を個別の情報収集にあてたため SIG には参加しなかった。

## 9. 教育セッションの日程とトピック

教育セッションはこのカンファレンスの中心に位置付くもので、毎年変わらない基本的な問題・課題に加えて、その時々必要に応じた最新のトピックについて、ひとりまたは複数の発表者からのプレゼンテーション、質疑応答、討論などが行われる。教育セッションは A から G の 7 つのブロックに分かれていて、1 つのブロックに複数のセッションが連続して開催されるのではなく、それぞれの

<sup>10</sup> 従来「黒人」を意味していた Nigro が差別的な意味を持っていたのに対して、この Black は、“Black is Beautiful.”のように今日では主体的で肯定的な意味で使われている。

<sup>11</sup> Learning Disorder 学習障害, Learning Difficulties 学習困難を、LD という略語を保ったまま呼び替えて「学び方の違い」と位置づける近年の言い方。同様な言い方に Learning Diversity 学習多様性がある。

<sup>12</sup> アライとは、LGBTQ+の理解者、支援者

<sup>13</sup> Regional Representative と呼ばれ、大学のある場所ではなく、大学から離れた地域に住んで、その地域のアドミッション・カウンセラーとして仕事をする人たち。遠くへの旅行が無いので家族を持ってもすることができ、比較的年齢も高く修士や博士を持っている人たちもいる。

ブロックでは、15 ほどのセッションが並行して開催される。つまり 1 つのブロック(時間帯)で参加できるセッションは 1 つである。セッションの多くはライブ配信 Live Streaming を行っていて、オンライン参加者が参加できるものもある。これは次のように開催される。()内は配信を行うセッションの数で内数である。

### 教育セッション 3 月 22 日(木曜)

A ブロック 12:45pm - 1:45pm 16(5)セッション

B ブロック 2:15pm - 3:15pm 16(6)セッション

### 教育セッション 3 月 23 日(金曜)

C ブロック 10:30am - 11:30pm 16(5)セッション

D ブロック 1:15am - 2:15pm 16(5)セッション

### 教育セッション 3 月 24 日(土曜)

E ブロック 9:30am - 10:30pm 15(4)セッション

F ブロック 11:00am - 12:00pm 15(5)セッション

G ブロック 12:30am - 1:30pm 13(5)セッション

それぞれのブロックでの各セッションのトピックは次の通りである。ただし、SIG ミーティングのタイトルはグループの名前であるため意味が分かりやすいが、教育セッションのタイトルは、それを読めば内容の分かるものばかりではなく、一種のアイキャッチャー的なものになっていて、セッションの説明を見なければトピックが何だか分からないものがかなり多い<sup>14</sup>。本稿ではできるだけ本来のテーマを残しながら、必要に応じて内容が分かるように訳している。その際、日本には馴染みの無い概念は読者にとっても関心のあるものだと考えられるので、註で説明する。なお、タイトルには有名なことばをもじったものなど(たとえば人種間の対話の必要性を取り上げたセッションは Black Lives Matter をもじって Dialogue Matters と名付けられているし、出願時に出すエッセイについてのセッションは right approach を意識して write approach とされている)が多用される傾向があり、訳するのが難しいものが多いが、可能な限り訳出を試みている。)

ところで今回のカンファレンスのテーマは RESILIENCE であり、このことばが、2 日目朝のコンカレントセッションのタイトルを初めとして、非常に多く用いられていたのが印象的であった。このことばには「耐性」というような意味と、耐性や弾力性による「回復力」というような意味があるが、今回は新型コロナウイルスでさまざまな影響を受けた高校、大学、大学進学からの回復という意味での使用

---

<sup>14</sup> これは 2019 年にダラスで参加した AACRAO SEM カンファレンスでも同じであった。その報告である大谷(2020)にも記したが、英語圏では論文のタイトルなどもそういう傾向があるが、その場合は副題から論文の内容が分かるようになっている。しかしこのようなカンファレンスでは、副題を見ても具体的な内容が分からないタイトルがたくさんある。近年スマホのアプリによって簡単に具体的な内容が分かるため、このような傾向がいつそう進んでおり、今後さらに進むかもしれない。

が多かったと感じる。しかし以下ではレジリエンス、レジリエント、レジリエンシーのままにしている。

なお、以下のブロックはセッションのテーマによって編制されているのではない。上記のように1ブロック(時間帯)に参加できるセッションは1つなのであるから、むしろ関連のあるテーマのセッションが複数のブロック(時間帯に)散らばるように設定されている。このようにして、そのテーマに関心を有する参加者が、関連するできるだけ多くのセッションに出られるようにしている。

## 教育セッション A ブロック 9/22(木)12:45-13:45

- A01. 2+2 は不公正<sup>15</sup>:若者のための財政的適合をエンパワーするクラウドソーシング・データ 2 + 2 = INEQUITIES: Crowdsourcing Data to Empower Financial Fit for Youth
- A02. 大学入学への書くアプローチ:レジリエントで責任感のあるエッセイ作成 The Write Approach to College Admission: Resilient and Responsible Reporting
- A03. 全米学生体育協会の学生選手を目指す生徒にアドバイスする Advising Prospective NCAA Student-Athletes
- A04. 自分自身をチェックしよう:ストレス、ステレオタイプ、そして偏見への新型コロナの影響を確認する Check Yourself: Addressing COVID's Impact on Stress, Stereotypes, and Bias
- A05. 集合的レジリエンス:第1世代学生<sup>16</sup>に対するヒューストンの複数の大学進学支援組織の異なるサポート Collective Resiliency: Houston CBOs Differentiate First-Gen Supports
- A06. カレッジ・エッセイ・ガイのカレッジ・カウンセラー・リソース狂想曲<sup>17</sup> College Essay Guy's Counselor Resource Extravaganza
- A07. 大学入学者選抜マインドを非植民地化する Decolonize Your College Admission Mind
- A08. 依頼物<sup>18</sup>をデザインする:大学入学に K-12 のパフォーマンス評価を用いて Designing the Ask: Using K-12 Performance Assessments in College Admissions
- A09. 大学教育のレディネスのための効果的な学生支援サービス Effective Student Support Services for Postsecondary Readiness
- A10. ホリスティック・アドミッションの倫理的含意:まっとうなことをする Ethical Implications of Holistic

---

<sup>15</sup> 原タイトルは 2+2=Inequity である。英語には、2+2=4, 2+2=5 という表現があり、前者は合理的なこと、後者は不合理なことを意味するのに使われる。(日本語の「1+1 は 2」というのが英語の 2+2=4 に相当すると考えられる。)つまりこの英語のタイトルは「不合理だけれど不公正は存在しているのだ」というようなニュアンスだと考えられる。

<sup>16</sup> 祖父母や親が大学卒でなくその家族で初めて大学に進学する生徒

<sup>17</sup> 「カレッジ・エッセイ・ガイ」とは、大学への出願書類に付ける志望理由書や活動実績報告書のようなエッセイ(レポート)の書き方に特化して専門に指導する著名な大学進学独立コンサルタント Ethan Sawyer 氏の自称であるとともに、その事業名である。このセッションは氏 1 人で実施しており、このセッションの命名方法は他のセッションとはかなり違っている。氏はこのカンファレンスでは他にプレカンファレンス・ワークショップ 1 つも担当している。氏のページは次 <https://www.collegeessayguy.com>。ちなみに氏は 2018 年にテキサス州ダラスで開催された米国の大学進学独立カウンセラー協会の年次会合 HECA (Higher Education Consultants Association) Conference 2018 (大谷、2019)にも参加してブースを出しワークショップを行っており、この時に筆者は氏から情報収集をしている。

<sup>18</sup> The ask は近年、動詞の ask に the をつけて名詞として「依頼する/した物」の意味で使われる。

Admission: Doing the Right Thing

- A11. グローバル・リバウンド:米国への留学生リクルートにおける最近の回復を理解する Global Rebound: Understanding the Recent Bounce in International Student Recruitment to the U.S.
- A12. 困難な時代にレジリエンスを示す公立学校カウンセラーたち Public School Counselors Demonstrating Resiliency in Tough Times
- A13. ホリスティック・サポートの力:大学進学支援業務の中心に学生のウェルビーイングを位置づける The Power of Holistic Support: Placing Student Well-Being at the Center of College Access Work
- A14. 学生のバリュー・プロポジション:学位課程に進む転入学生にとっての障害を減じる The Student Value Proposition: Engaging Transfer Students with Degree Pathways to Limit Friction
- A15. 戦いに勝つ:実際に生徒の指導に使っている時間を確認する Win the Battle: Time Track Your Way to Actually Advising Students
- A16. あなたのモデル・マイノリティではなく:アジア系アメリカ人の複雑性を検証する Not Your Model Minority<sup>19</sup>: Examining the Complexities of Asian America

## 教育セッション B ブロック 9/22(木)14:15-15:15

- B01. 理に合わないコロナ後の入学状況にどうやって意味を見いだすか How to Make Sense of a Post-Covid Admission Landscape That Makes No Sense
- B02. 法律的情報を理解し人種と入学に関する連邦最高裁判所の重大な判断に備える Understanding the Legal Landscape and Preparing for Consequential Supreme Court Decisions on Race and Admission
- B03. 今後の家族の関わり:情報へのアクセスを通じた公正への道 Prospective Family Engagement: A Path to Equity Through Access to Information
- B04. Data は 4 文字言葉ではない<sup>20</sup>:活用し、インパクトを示し、秀でよ Data is NOT a Four-Letter Word: Use It, Show Impact, and Excel(このセッションはキャンセルされた)
- B05. ブラック・エクセレンス・リーダーシップ・ラウンドテーブル Black Excellence Leadership Roundtable
- B06. アドミッション(を出す)側にいる我々の仲間<sup>21</sup>への高校側の見方 High School Perspectives for Our College Admission Colleagues
- B07. 高等教育への難民の増加するアクセス Increasing Refugee Access to Higher Education
- B08. 大学に払うことについてのリアルスcoop:学生と家族の期待 v.s.現実 The Real Scoop on

---

<sup>19</sup> マイノリティの中で成功している人たち。アジア系アメリカ人は、しばしばモデル・マイノリティと見なされる。

<sup>20</sup> 4 文字言葉 four letter words とは、「shit」などの、アルファベット 4 文字で綴られる卑語。このタイトルは「data も 4 文字だが忌み嫌わず親しみを持って活用しよう」という意味だと考えられる。また最後の「秀でよ」は excel という動詞であるが、「Excel を使おう」という意味とかけられていると思われる。

<sup>21</sup> 大学側のアドミッション部門やアドミッション・オフィサーを指している。

Paying for College: Students' and Families' Expectations vs. Reality

- B09. 軍隊関連学生のためのインクルーシブな入学実践を創造する Creating Inclusive Admission Practices for Military-Connected Students
- B10. その他の割り当てられた任務:インデペンデントスクールにおける黒人カレッジカウンセラーの(非公式だが本質的な)役割 Other Duties as Assigned: The (Unofficial Yet Essential) Role of Black College Counselors in Independent Schools (
- B11. それなら誰がエンrollment・マネージメント主任になりたいのか? So Who Wants to be a Chief Enrollment Management Officer?
- B12. 2022 年度学生調査報告:学生、カウンセラー、大学での経験への洞察 2022 Annual Student Quest Report: An insight into the student, counselor and university experience
- B13. 入学者選抜の努力を最大化するための証明ずみのアプローチ Proven Approaches to Maximizing Admissions Efforts
- B14. AXS Companion<sup>22</sup>:コモンアプリケーション<sup>23</sup>への生徒のアクセスを増やすための新たなツール The AXS Companion: A New Tool to Increase Student Access to Common App
- B15. レジリエンスのあるテキサスの動的大学入学者選抜ポリシーを紹介する:昔と今 Navigating Texas' Dynamic College Admissions Policies with Resilience: Then and Now
- B16. サービスの行き届いていない学生のための機会の拡張のための入学者選抜の変革 Transforming Admission to Expand Opportunity for Underserved Students

## 教育セッション C ブロック 9/23(金)10:30-11:30

- C01. もはや雇用「サイクル」の存在しない時代のスタッフ・マネージメント Managing Staffing when the Hiring “Cycle” No Longer Exists
- C02. 貴校の国際学生募集戦略は国内学生のそれとどう異なるべきか How Your International Recruitment Strategy Should Differ From Domestic
- C03. 2022 年全米地域アドミッション・カウンセラー<sup>24</sup>協会の調査結果 2022 National Association of Regional Admission Counselors Survey Results
- C04. タイトル 1 校<sup>25</sup>からの進学者のための入学障壁を取り除く Breaking Down Admission Barriers for Students from Title I Schools

---

<sup>22</sup> Common Application による出願のために、独立カウンセラー協会である Independent Educational Consultants Association (IECA)とオレゴン大学とが共同で作上げた情報環境  
<https://open.oregonstate.education/axscompanion/>

<sup>23</sup> 複数の大学に共通して出願することのできる出願システム、同様のものに Coalition Application がある。

<sup>24</sup> 註 13 を参照。

<sup>25</sup> Title 1 とは低所得者の多い校区の学校を支援する連邦プログラムで、Title 1 school とは低所得とされる家庭の子 students from low income families が 40%以上在籍している学校。

- C05. Grit<sup>26</sup>、Fit<sup>27</sup>、その他の低所得学生の支援に失敗した考え Grit, Fit and Other Ideas that Failed to Help Low-Income Students
- C06. パンデミック後の入学者選抜プロセスの進むべき道:学生の能力、品性、知識を高めるための機会 Navigating A Post-Pandemic Admissions Process: Opportunities to Elevate Student Skills, Character, and Knowledge
- C07. 男女二元論を超えて:コモンアプリケーションにおいて LGBTQIA 学生を支援する Beyond Binary: Supporting LGBTQIA Students in the Common App
- C08. カレッジ・レディ<sup>28</sup>・カウンセラー:レジリエンスのためのリソース College-Ready Counselors: Resources for Resilience
- C09. 人種コンシャスな入学者選抜の将来:ノースカロライナ大学とハーバード大学に対する訴訟に関する最新情報<sup>29</sup> The Future of Race-Conscious Admission: Update on the UNC and Harvard Cases
- C10. 刑務所から大学への道:投獄されて戻ってくる学生のための道程に光をあてる Prison to University Pipeline: Illuminating Pathways for Incarcerated and Returning Scholars
- C11. 高校プロフィールを再考する:我々は大学が必要とするものを提供しているか? Rethinking the School Profile: Are We Sharing What Colleges Need?
- C12. 未来はここに:大学入学者選抜におけるパフォーマンス評価 The Future is Here: Using Performance Assessment in College Admission
- C13. 2022 の独立教育コンサルティング:神話とステレオタイプに挑戦する Independent Educational Consulting in 2022: Challenging Myths and Stereotypes
- C14. 新型コロナの中と後での学費の決定と減額 Tuition Pricing and Discounting Through and Beyond COVID-19
- C15. 最初になることの誇り:第1世代ファミリーをエンパワーするための方法と戦略 Proud to be First: Tools and Strategies to Empower First-Generation Families

---

<sup>26</sup> Grit とはそのままでも「やり抜く」ことを指すため GRIT と書いてないが、近年では非認知的能力である Guts (度胸)、Resilience (復元力)、Initiative (自発性)、Tenacity (執念)の頭文字を当てはめられて二重の意味を与えられている。これは長期的目標の達成の基盤とされ、後天的に育成可能なものとされる。

<sup>27</sup> 低所得の生徒は自分の能力より低い水準の大学に進学する傾向があることが知られるようになってきている(たとえば Hoxby and Avery(2013)は高い学力を持っていても定収入の家庭の子はその8%しか学力に見合った進学をしていないと指摘している)。これは undermatch と呼ばれているが、彼らの成功を支援するために、彼らの学力に適した進学をさせようとする動きが fit である。

<sup>28</sup> college-ready は通常、大学での学習に対するレディネスを持ったという意味で高校生に使われる概念であるが、ここではあえて高校側のカレッジ・カウンセラーにそれを適用し、カウンセラーたち自身のパンデミックからの回復を扱っている。collage counselor という熟語の中に ready を入れ、college-ready と college-counselor の2つの熟語を含んだことばにした、一種のことばの遊びであると理解できる。

<sup>29</sup> 人種や民族による入学者選抜での不利益に対して働く非営利団体である SFFA: Students for Fair Admission とノースカロライナ大学との訴訟についての最新情報とそれを巡る議論のセッション

C16. 選抜性の高い入学者選抜における黒人、先住民、有色人種の学生募集戦略 BIPOC<sup>30</sup>  
Recruitment Strategies in Selective Admission

教育セッション D ブロック 9/23(金)13:15-14:15

- D01. 大学への推薦を再デザインする:品性、背景、(家庭や共同体への)貢献 Redesigning College Recommendations: Character, Context & Contribution
- D02. 投資利益率の非神秘化:データ主導型募集戦略を構築する Demystifying ROI<sup>31</sup>: Build a Data-Driven Recruitment Strategy
- D03. 知識は力なり<sup>32</sup>:カレッジカウンセラーのためのデータ・リテラシー Knowledge is Power: Data Literacy for College Counselors
- D04. 忘れられた出願者:米国の高校における留学生 The Forgotten Applicant: International Students in US High Schools
- D05. この生徒はなかなかはっきりと物を言う子です:推薦書におけるバイアスの排除 “He’s So Articulate”: Avoiding Bias in Recommendation Letters
- D06. 60 分での 60 の TIPS<sup>33</sup>:どのようにして好結果の大学ツアーガイドプログラムを運用するか 60 Tips in 60 Minutes: How to Run a Successful Tour Guide Program
- D07. コミュニティと帰属を創造する方法について産業界を見渡してみる<sup>34</sup> A Look Across Industries on Ways to Create Community and Belonging
- D08. スクールカウンセラーと学校管理職の間の強力な関係=生徒の成功 Strong School Counselor and Administrator Relationships = Student Success
- D09. トランスジェンダーの生徒のためのインクルーシブな環境を創造する Creating An Inclusive Environment for Transgender Students
- D10. 人種差別主義は(も)レジリエンスを有する:白人至上主義は公正な入学者選抜にどのように存続するのか Racism is (Also) Resilient: How White Supremacy Persists in Equitable Admission
- D11. 対話こそが大切である:白人が圧倒的多数を占める大学での困難な対話についてのレジリエ

---

<sup>30</sup> Black, Indigenous, and People of Color の略語で、米国のマイノリティに関するあらたな概念。

<sup>31</sup> Return of Investment. 今日では大学での授業料などの教育投資(自己投資)とそこから得られるメリットについてもこの概念が用いられる。今日では ROI を指標とした大学ランキングも行われる。たとえば Adams(2013)など。

<sup>32</sup> フランシス・バーコンのことばを使っている。なおこのセッションの担当者は独立カウンセラーの Leigh Moore であるが、彼女の経歴が非常にめずらしいのでここで紹介しておく。彼女は高校の数学教師を経て、歯学部に進学して歯科医になっている。その後、育児のために歯科医をやめてライターとしてフリーランスになる。その後再び高校数学教師に戻ったが、そこで進学カウンセリングに職務を拡大した後、独立カウンセラーになっている。

<sup>33</sup> これは高校生(と保護者)のための大学見学ツアーが、通常 1 回 60 分程度であることに基づくタイトルだと考えられる。

<sup>34</sup> スピーカーの 1 人はデルタ航空のジェネラル・マネージャーである。これはコミュニティ作りについての産業界での努力を知り、高校や大学でのその活用について検討するセッションである。



- ンスを構築する Dialogue Matters<sup>35</sup>: Building Resilience with Difficult Conversations at PWIs<sup>36</sup>
- D12. 将来の ACT/SAT オプションとテスト結果非提供／自由提供 The Future of ACT/SAT-Optional and Test-Blind/Score-Free Admission
- D13. 転入学選抜: コミュニティカレッジの観点をノーマライズする Transfer Admission: Normalizing the Community College Perspective
- D14. より低学年の生徒を大学進学成功へと結びつける Engaging Younger Students for College Success
- D15. 可能な大学進学: 養子である若者の高等教育へのアクセスを支援する College Possible: Helping Foster Youth Access Higher Education
- D16. Z 世代(デジタルネイティブ世代)による進化を続ける大学入学の旅 Gen Z's Evolving Enrollment Journey

### 教育セッション E ブロック 9/24(土) 9:30-10:30

- E01. 分断を突破する: 実践家と研究者が変革のために信頼と協働を構築する Breaking Through the Divide: Practitioners and Scholars Building Trust and Collaboration for Change
- E02. 適切なデータを用いた経営陣と部下への対応 Managing Up & Down with the Right Data
- E03. 大学入学選抜におけるダイレクト・アドミット・プログラムの詳細視 A Closer Look at Direct-Admit Programs in College Admission
- E04. 障害者は禁句ではない: 障害者にとって近づきやすいアドミッションオフィスのための TIPS Disabled isn't a Dirty Word: Tips for an Accessible Admission Office
- E05. 大学進学の希望と不安の調査: 生徒の希望、恐れ、そしてレジリエンス College Hopes & Worries Survey: Student Hopes, Fears & Resilience
- E06. 協働を通じたレジリエンシー: 高校での効果的で発展的な学校カウンセリングカリキュラムを達成する Resiliency Through Collaboration: Delivering an Effective Developmental School Counseling Curriculum at the High School Level
- E07. 経済的支援の創発のケーススタディ Inventing the Financial Aid Case Study
- E08. リーダーシップと成長の機会を通じたアイデンティティの交差点での舵取り<sup>37</sup> Navigating Identity Intersections Through Leadership and Growth Opportunities
- E09. 生徒のライフサイクルを支援する<sup>38</sup> Supporting the Student Lifecycle

<sup>35</sup> これは明らかに“Black Lives Matter”から取られている。

<sup>36</sup> Predominantly White Institutions の略。

<sup>37</sup> タイトルからは内容が分かりにくいですが、大学側のアドミッション部門の専門職員の抱える問題と発展のためのセッションである。

<sup>38</sup> 発表者の学校での未就学期-幼稚園-小学校-高校、そして卒業後までのデータを用いた支援の紹介。

- E10. 大学入学者選抜における新しい微積分学<sup>39</sup> A New Calculus for College Admissions
- E11. 活躍への歩み:養子だった若者のためのプログラム化を支えるために生きられた経験を利用する Steps to Flourishing: Using Lived Experiences to Inform Programming for Former Foster Youth
- E12. 大学入学者選抜プロセスにおける倫理の進化 The Evolution of Ethics in the College Admissions Process
- E13. テスト・オプショナル/テスト・フリー入学者選抜の進化 The Evolution of Test Optional/Test Free Admissions
- E14. トラウマを告げられたカウンセラーは個々の生徒の成功を支援する Trauma Informed Counselors help every Student Succeed(このセッションはキャンセルされた)
- E15. ラテンアメリカ系生徒の募集:ニーズ、願望、そして戦略 Latin X Student Recruitment: Needs, Wants, and Strategies

## 教育セッション F ブロック 9/24(土)11:00-12:00

- F01. 米国の士官学校:スクールカウンセラーと学校事務職のためのガイド<sup>40</sup> US Service Academies: A Guide for School Counselors and School Officials
- F02. 大学のための国際エンロールメント基準 International Enrollment Management Standards for Institutions
- F03. 数字の強み:データを用いたより良い入学者選抜の創出 Strength in Numbers: Creating Better Enrollment Outcomes with Data
- F04. レジリエントなアドミッション・チームとともに入学者目標を達成する Achieving Enrollment Goals with a Resilient Admission Team
- F05. 大学入学者選抜をクイア化する Queering College Admission
- F06. 委員会ベースの評価:(パンデミック前の)モデルはどのようにパンデミックを耐え進化したか Committee-Based Evaluation: How Has the Model Endured and Evolved?
- F07. 溶けの物語り:来年の「夏溶け<sup>41</sup>」をどう克服するか The Melt Chronicles: How to Overcome Next Summer's Melt

<sup>39</sup> 出願者が高校で微積分を取っておくのが有利か、それは今後の社会にとって必要かという議論から、大学入学者選抜における数学の成績の意味を検討するセッション。

<sup>40</sup> 発表者 2 人の所属は海軍士官学校。米国では陸軍、海軍、空軍の士官学校は学士学位を授与する degree granting institute であり大学と同等。

<sup>41</sup> 「summer Melt 夏どけ」とは、5/1 までに入学手続きをしたのに新学期の 9 月に大学に入っていない学生がいる現象のこと。これを防ぐため、エンロールメント・マネージメント担当者は、入学予定の学生に連絡を取ったり、かれらを訪問したりすることがある(Castleman, Page & Snowdon, 2013)。またそのような傾向のある学生を発見するために AI を用いる試みさえなされている(Ravipati, 2017)。なおこの語は、夏期休暇中に学生が勉学への意欲を失ったり経済的に問題をかかえたりして大学に戻ってこなくなる場合にも使われることがある(大谷、2020、2021)。

- F08. 学習差異を有する学生の支援をする人々のためのカレッジ・レディネス・ツール College Readiness Tools for Those Serving Students with Learning Differences
- F09. 公務員の学生ローン免除制度:何が新しくなったのか Public Service Loan Forgiveness<sup>42</sup>: What's New
- F10. 学生リーダーからアドミッション・カウンセラーへ:経路の創造 Student Leaders to Admission Counselors: Creating a Pipeline
- F11. 20 年目の『ゲートキーパーたち』:あるジャーナリストのアドミッション・オフィスでの張り付き取材の再考<sup>43</sup> The Gatekeepers at 20: Revisiting a Journalist's Embed in an Admission Office
- F12. 私たち(とかれら)の物語り:個人的ナラティブと推薦状 The Story of Us (and Them): Personal Narratives and Recommendation Letters
- F13. 転入学生が橋を渡るのを支援する:大学の学資負担の問題への不安に取り組んで非スティグマ化する Helping Transfers Cross the Bridge: Addressing and Destigmatizing University Affordability Concerns
- F14. 自分は在学しているべきか?退学すべきか?:大学初年次にさまざまな課題を経ていく学生の支援 “Should I Stay or Should I Go?”: Supporting Students Through Challenges in Their First Year of College
- F15. 均衡の創造:中等後教育を探索する先住民の学生のためのアクセスをどのように意図的に提供するのか Creating Balance: How to Intentionally Provide Access and Support for Indigenous and Native Students Seeking Post-secondary Education

## 教育セッション G ブロック 9/24(土)12:30-13:30

- G01. 「なぜ私たちが?」:追加エッセイに大学が望むものと生徒たちが自身について明らかにするもの “Why Us?”: What Colleges are Looking for in Supplemental Essays and What Students Reveal About Themselves
- G02. (設定無し)
- G03. デュアル・エンrollment<sup>44</sup>を通した橋渡し Building Bridges through Dual Enrollment
- G04. 高校生の学資支援と進学先決定プロセスについての理解を助けるカウンセラーTIPS とツール Counselor Tips and Tools for Helping Students Understand Financial Aid and the College Decision Process

<sup>42</sup> Public Service Loan Forgiveness とは PSLF と略され、連邦学生ローンを借りた人が公務員としての勤務条件を満たすことでローンが免除になる制度。

<sup>43</sup> Gatekeepers とはジャーナリストの Jacques Steinberg が、ウェズレヤン大学のアドミッションオフィスでの1年間の取材の成果を2002年に本にしたもの。ホリスティック・アドミッションのあり方を紹介した書として有名で、その後28刷を経ている。その刊行から20年目に、Steinberg 本人が当時のアドミッション・オフィサーらとともにセッションに登場する。このセッションは大きな会場に設定された。

<sup>44</sup> 高校生が高校に籍を置いたまま大学の科目を履修し、両方の単位を取得すること。参照、大谷(2021)。

- G05. 私達の行くところ:イベント企画についての不確実性を包み込む Oh, The Spaces We Will Go! Embracing Uncertainty with Event Planning
- G06. 大学一年生になるか、転学して大学に入るか、コミュニティ・カレッジに進学するか? ああ、もう! First Year, Transfer OR Community College? Oh My!
- G07. 古紙回収箱から出てメタバースへ:モバイル AR を活用して印刷物主体のマーケティングを再考する 4 つの方法 Out of the Recycling Bin and into the Metaverse: Four Ways to Rethink Paper Marketing Using Mobile AR
- G08. 第 1 世代で低所得の学生にとって条件をどのように平等にするか How to Level the Playing Field for First-Generation, Low-Income Students
- G09. K-12 の観点からのレジリエンシーについての重要な会話 Crucial Conversation about Resiliency from a K-12 Perspective
- G10. グローバル・シチズンの形成:変化を続ける世界における国際教育の役割 Shaping Global Citizens: The Role of International Ed in a Changing World
- G11. 人口の壁<sup>45</sup>:黒人学生の募集への影響 The Demographic Cliff: The Impact on Recruitment of Black Students
- G12. SIG の力:パンデミックの間の我々のメンバーシップへの奉仕と活動範囲の拡張 The Power of SIGs: Serving our Membership and Broadening our Reach During the Pandemic
- G13. 高校カウンセラー対象の全国調査からの大学の入学者選抜チームのための実行可能な洞察 Actionable Insight for College Admission Teams from a National Survey of High School Counselors
- G14. アジア系アメリカ人と太平洋諸島系住民の声:高校と大学でのレジリエンスの経験の共有 Voices of Asian American Pacific Islanders: Shared Experiences of Resilience in High School and College

教育セッションの内容は以上である。

## 10. NACAC 倫理綱領の 2019 年の変更について

### (1) これまでの調査の経緯

上記のとおり、今回、ぜひ対面で参加したいと考えた背景が、NACAC 倫理綱領の変更について直接に情報を得たいと願ったことであった。これについては、最初に次の短い報告に記したので、詳細はそこでの記述に譲る。本稿の読者はぜひそちらを先に読んで頂きたい。

大谷(2021)アメリカの大学の入学者選抜に今後大きな変化が起きるか? —米国大学の統一的

---

<sup>45</sup> Dent, Jr. (2015) で提唱された造語

な募集・出願・合否判定・入学勧誘・入学手続きに関する専門職団体 NACAC の「倫理及び専門職的実践規範」の変更―名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属高大接続研究センター紀要. 6. 59-64

しかしここでも最小限の解説を加えておきたい。NACAC が入学者選抜の枠組とさまざまな手続きを全米共通で決めていることは上記の通りであるが、NACAC は倫理綱領「倫理及び専門職的実践規範 Code of Ethics and Professional Practices」を有していて、ここに多くのことを規定している。

たとえば、ある出願者が複数の大学から合格通知を受け取った場合、入学手続き前であれば、その学生に奨学金提供の提示をしてその出願者の獲得合戦をすることは認められているが<sup>46</sup>、出願者がいったんどこかの大学に入学金(deposit)を納付して入学手続きを済ませれば、それ以降は他大学がその学生に自大学への入学を促すアクションを起こしてはならないとしていた。また、米国には、通常より早い出願を行って合格通知を得る Early Admission という制度がある。これは、10/15 か 11/1 を出願締め切りとし、合格通知は 12/15 までに出る。これはさらに、Early Action と Early Decision に分かれ、前者は合格通知を受け取っても入学義務は無いが、後者は日本の学校推薦型選抜のように、合格すれば入学義務がある。この Early Decision の場合も、合格通知を受け取った学生に、他大学が自大学への通常の出願(Regular Admission 12 月から 2 月が出願締め切りで合否通知は 3 月から 4 月)の勧誘をしてはならないことになっていた。

しかし NACAC は、2019 年に上記の倫理綱領から、このような点に関係する 4 項目を削除した(NACAC(2019), INSIDE HIGHER ED(2019), NATIONAL COLLEGE ATTAINMENT NETWORK(2019), ROAD 2 COLLEGE(2019), DYSART GROUP(2020), Forbes(2020), NACAC(日付不明)。それは、連邦司法省 Department of Justice による「独占禁止法・競争法 Antitrust Law」違反の疑いがあるとの指摘、つまり「これは自由競争を阻害している」という指摘に応じたためであった。

このため、その後の大学入学に変化が出て来ると考えられた。たとえば、米国では日本と同様に、いったん入学手続きをすれば、その大学に入学しなくても入学金<sup>47</sup>の返還は受けられないが、別の大学がそれを上回る奨学金を提示すれば、既に入学手続きをした出願者にその入学金を「捨て」させることでその学生を「横取り」することができる。そのため当時、今後は入学金の金額を上げて、他大学がそういう提示をしにくくするのではないかと言われ、上記の大谷(2021)でもそのような情報を紹介した。

また、このような事態になると大学のアドミッション部門の仕事の内容はかなり変わってくると考えられた。これまで、上記の Early Decision の学生を他大学に横取りされることは無かったため、それに対する配慮や努力は必要なかった。しかし今後はそれが必要になってくる。またこれまでは、合格通知を出した Regular Admission の出願者に対して必要な努力は、複数の大学からアドミッションつまり合格通知を受け取った学生を、できるだけ自大学に誘導することであり、合格通知から 5 月 1

<sup>46</sup> この様子は、主演の女性の俳優がアドミッション・オフィサーを演じた 2013 年の米国映画「Admission」でも描かれている。

<sup>47</sup> deposit と呼ばれ、入学後の授業料の一部に充当される。

日の入学手続き締め切り日までに、カレッジフェアなどで自大学の魅力をアピールしたり、合格者に連絡をして入学手続きを強く勧めたり、他大学に入学手続きをしようとしている学生には、奨学金を提示して自大学に入学手続きをさせたりすることであった。そして、5月1日を過ぎれば、アドミッション部門の仕事は一段落するのであった。しかし今後は、5月1日までに自大学に入学手続きをした学生が5月1日以降に他大学に横取りされる可能性が出てくるため、自大学に入学手続きをした学生の「引き留め・保持 retention」の努力をしなければならなくなる。これらのことも上記報告書に記した<sup>48</sup>。

今回、これらのことがその後どうなったのかを調べたかった。またそもそも、連邦司法省はどのセクターからの要求に基づいてこれを問題だと認識し始めて調査を行い、勧告をしたのか、その勧告に対してNACAC内ではどのような反応や議論があったのかも知りたかった。これは、大学入学者選抜の統一的な運営方法を専門職団体が決めるという米国固有のフレームワークゆえに起きたことであるため、そのようなフレームワークの特性(メリットと問題点)を知るためにも、これを理解したかった。だからこそ、直接に話のできる対面参加を必要としたのであった。そして大変ありがたいことに、今回、この点についても複数の適切な人物から貴重な情報を得られた。

## (2) 今回の参加でのNACACのキーパーソンへのアプローチのための準備

まずキーパーソンにアプローチするためには、筆者がこの問題についてある程度知っており、これを重大視してすでに報告を書いていることを短い時間で分かってもらう必要があると考えた。そのため、上記の大谷(2021)を印刷し、削除された4つの条項の英字と数字から成る4つの記号に黄色いマーカーで記を付けた。この報告は英語ではなく日本語であったので、これを見ても何が書いてあるか分からないと思われるが、この倫理綱領の変更の問題は大きく、NACACの担当者も苦慮したものであろうから、4つの条項記号を見るだけで、筆者が何を問題にし、何を知りたいのかが瞬時に分かって貰えるのではないかと考えた。くわえて、筆者が情報を得たいキーパーソンはきっと今回のカンファレンスでも重要な役割を担っていて多忙であると推測したので、時間をかけて説明することは困難と推測し、このような方法を採用ことにした。

もうひとつ、筆者のバックグラウンドも知ってもらう必要があった。それで今回のためのあらたな英

---

<sup>48</sup> 2019年には、米国の大学入学者選抜に関して、非常に大きな事件が起きたのでここに付記しておく。それは、自分の子どもを不正に合格させようとした保護者と入学者選抜の関係者たちが50人も起訴された事件である。それらの保護者の中には、人気テレビ番組のレギュラーをつとめアカデミー賞主演女優賞にノミネートされたセレブや有名実業家が含まれていたことや、保護者が不正入学させた娘の1人がチャンネル登録者数100万人を超える有名なYouTuberでインフルエンサーであったことなども、この事件を有名にした。実際には、これらの不正は2011年頃からはなされていたことが分かっている。ただし、この時の不正には、SATやACTの替え玉受験や得点改ざんの他、スポーツでの入学が利用されているが、スポーツで奨学金を得て入学する運動選手 Student-athletes は、NACACのこの規定ではなく、National Collegiate Athletic Association (NCAA), the National Association of Intercollegiate Athletics (NAIA), and the National Junior College Athletic Association (NJCAA) 等の規定に従う。なお、この事件は、“Operation Varsity Blues”というタイトルでテレビ番組化され、2021年3月17日からNetflixで配信されてさらに話題となった。

語の名刺を作成し、裏面には、筆者が日本の高大接続改革について英語で執筆した次の論文の書誌情報と、その PDF の URL の二次元バーコードを作成して印刷した。

Takashi Otani(2022) Japan's University Entrance Examination Reform in Deadlock : Why Were the Planned Changes Postponed in One of the Most Revolutionary and Comprehensive Education Reforms Since World War II. *Bulletin of Center for Higher Education Transitions (CHET)*. 7. 82-92

この論文はネイティブの専門校閲者に英文校閲を受けているので、関心があったらぜひこれを読んで欲しいと示せるようにした。

このような準備をして開催地に赴き、1 日目のレジストレーションの直後に、今回のプログラムの WEB ページについて質問するために Q&A のブースに並んでいると、黒い紐の名札(Conference Badge)を下げた NACAC の役員のように見える男性が、筆者の方にやってきた。その男性は、筆者がなにかニーズを持っていると見抜いたのではないかと感じられた。それで筆者からその男性に「あなたは他の人と異なる黒い紐の名札を下げているが、その紐の色の意味は何か？」と声をかけると、「自分は NACAC の役員だ。あなたは何か私に頼みたいことがありそうだね？」と言われた。そこで「あなたには何でも分かる Sixth Sense があるようだ。じつは私には、まさに頼みたいことがある。」と言って、上記の名刺と上記の条項名がマークされた論文を見せて、これについて話が聴ける人を紹介して欲しいと頼んだ。そうするとすぐに筆者の意図を理解して、この人物が最も詳しいからと、次の人物を紹介してくれた。

### (3) NACAC 専門職員 A 氏からの聴き取り

それは NACAC の Education and Policy Officer のうちでも重要な役割を担っている A 氏であった。NACAC は大学や高校に所属する多くの会員を抱えているし、会長や役員たちはそういう会員から選ばれるのだが、A 氏はそのような会員ではなく、NACAC の専門職員である。A 氏に会って筆者が自己紹介をし、持参した資料を見せると、マーカーでマークした条項名を指でひとつひとつなぞりながら、感慨深そうに、そしてあたかもその時の苦悩を思い出すかのような表情で「ああ、これとこれとこれとこれかあ...これは大変だった...」と言って話を始めてくれた。この A 氏とは会期中なにか会って聴き取りをした。A 氏には、とくに次の 3 点を聴いた。

- ① 連邦司法省からの指摘のきっかけとなった何らかの訴えがあったのか？
- ② 連邦司法省からの指摘を受け入れず司法省と争うことは検討しなかったのか？
- ③ この改定の影響によるその後の変化はどうか？

これらについて、以下に順に記す。

#### ① 連邦司法省からの指摘のきっかけとなった何らかの訴えがあったのか？

これは大谷(2021)でも述べたが、そもそも今回削除された文言は、大学が自由競争によって優秀な学生を横取りし合うような弱肉強食の世界になることを防いで来たものと考えられる。同時に、いったんある大学に入学を決めた学生が、他の大学からの好条件を伴う入学勧誘によって振り回され、

混乱することを防いでいたのだと考えられる。(それとともに、これらの文言は、大学の入学者選抜担当職員であるアドミッション・オフィサーらの職務の無限定な拡大を防ぐ機能をも持っていたと考えられる。)それに対して、自大学に入学する学生を、どの段階でどこからどのように確保しようとも、それは自由競争であり、それを NACAC が倫理綱領で拘束するのは違法だという指摘がなされ、これらはその指摘に基づく改変である。このことは、大学はあくまで「教育機関」であるとして、自由競争の原理を適用すべき世界とは見なされていなかったのが、大学も、教育消費者に教育サービスを提供する「企業」だとみなされるようになってきたためだと考えることもできる。しかしそのような状況になることは、大学を過酷な状況に追い込むことになる側面も有している。

しかしながら体力(財力)のある大学で、かつ今後これまでより優秀な学生を獲得して、大学の水準を上げようとする上昇志向の大学なら、そういう訴えをするかもしれないと考えた。

また、出願者の中には、9 月まで進学先の大学が決められずに、ルールに違反して、大学には告げずに複数の大学に入学手続きをしてしまう人たちや、9 月までの間に奨学金の提供を大学から引きだそうとして、やはり大学には告げずに複数の大学に入学手続きをしてしまう人たちがいることも、これまで見た資料に書かれていた。そのため、大学側ではなく、生徒や保護者の側が、そのような訴えをした可能性も否定できなかった。

さらに、今回のような変革があっても、高校のカレッジ・カウンセラーは、伝統的な方針を維持したまま高校生の大学進学を援助するのではないかと思われるが、独立カウンセラーの中には、事態の変化にすばやく対応する人たちがいるのではないかと考えられた。その場合、今回のような変革は、独立カウンセラーへのニーズとかれらのビジネスチャンスを拡大する可能性がある。しかも独立カウンセラーの中には、個人でなく企業として業務を行っているところもあり、そのようなところは法律顧問もいて、法的な問題点を指摘しやすい立場にあると考えると、このセクターからの訴えであった可能性も否定できないと考えていた。

以上のことから、いったいどのようなセクターからの要求によって連邦司法省が動いたのかを知りたいと考えていたのである。

これについての A 氏の回答は、「特定のセクターからの訴えに基づくものではないと考えている」であった。それに対する筆者の「連邦司法省は、訴えもないのに問題を指摘するのか？」という問いに対しては、「連邦司法省は、常にさまざまな領域について、自由競争を発展させる目的で監視を行っているので、連邦司法省が独自に判断してこの動きを始めたのではないかと考えている」とのことだった。ただしこれについては、開催期間中に会った NACAC の別のキーパーソン B 氏からは異なる考えを聞いた。それについては後述する。

## ② 連邦司法省からの指摘を受け入れず司法省と争うことは検討しなかったのか？

これについては、争うかどうかは、確かに当時、非常に重大な問題であったとのことであった。それで、最終決定の前には司法省となんどもやりとりを重ねたとのことであった<sup>49</sup>。そして当然、連邦司

<sup>49</sup> 当局との交渉にどれくらい期間をかけるものか、この話を聞いたときは実感がなかった。しかし、日本で、公正取引委員会がアップル社の行為が独占禁止法違反と考えて 2016 年 10 月に審査を開始し、同社が、関連するガイドラ



法省との間で法廷闘争を行うことも検討した。しかしその結果、もし負ければ、NACAC にとってそれは非常に大きなマイナスになると考えられ、争うことには大きな危険性もあった。そのため、慎重な検討の結果、連邦司法省の指摘を受け入れるという苦渋の選択をしたのだとのことであった。

### ③ この変更の影響によるその後の変化はどうか？

その後、ある大学に入学手続きをした学生に、別の大学が奨学金を提示して、優秀な学生を横取りするような弱肉強食の動きが始まっているのかを知りたかった。また、上述のような、入学一時金(deposit)の額を上げてそれに対抗する動きが出てきているのかを知りたかった。

これについては、「まだ大きな動きは出ていない」とのことだった。「ただ、個々の大学で何が起きているかは NACAC としては把握していないので、全体としての正確な情報をつかんでいるわけではない」とのことだった。

ただし、筆者の見るところ、攻める方も守る方も、そのような動きに出る前に、パンデミックの影響を受け、大学は大変な状況になった。そのような混乱の中で大きな動きをすることは、大学にとっても危険であるので、そういう動きに出られなかった大学もあったのではないかと考えられる。したがって、パンデミックの終息にともなって、今後、このような動きが出てくるかもしれないと考えられる。

### (3) NACAC 元会長 B 氏からの聴き取り

本件について NACAC 元会長の B 氏からも聴き取りを行うことができた。B 氏からは、A 氏とほぼ同様の情報を得たが、「①連邦司法省からの指摘のきっかけとなった何らかの訴えがあったのか？」については、B 氏は A 氏と異なる見解を示したのでここに記す。

B 氏によれば、連邦司法省がそのような動きに出た背景には、「やはりなんらかの訴えがあったのではないか」とのことであった。それに対して筆者が、「それは大学、高校、保護者、独立カウンセラーなどのどのセクターと思うか？」と聴くと、「それはやはり大学だろう」とのことだった。「NACAC の加盟大学の中にも、NACAC の方針を全面的に支持しておらず、その大学のニーズのためにこの方針の変革を望んでいた大学もあるように思う」とのことだった。元会長はさまざまな情報を把握していると考えられる。その点で、上記の NACAC 職員の A 氏の回答は、いわば優等生的なものであるが、NACAC 元会長のこの回答は、いわば、より踏み込んだものであると評価する必要があるかもしれない。

### (4) その他の人々からの聴き取り

その他の人々からも、時間と機会が許す限り同様な情報収集を試みた。結果的に、自分の大学

---

インの規定を改訂する等の改善措置を行って本件が決着したのが 2021 年 9 月であった(公正取引委員会、2021)ことを踏まえると、NACAC のこの件についても両者の間で相当に長い期間のやりとりがあったことが想像できる。

が、この改訂を機にそれまでやっていなかったこと、つまり他大学に入学手続きをした学生に奨学金などを提供して自大学にリクルートする行為を行っているという参加者には、会うことはできなかった。しかしたとえば、ノースカロライナ州にある 1900 年代初頭創立で現在の学生数 3,000 人弱の規模の大学のオーナーズ・カレッジ<sup>50</sup>のアドミッション・オフィサーは、「自分の大学では横取りはしていないが、横取りをする大学によって自分の大学に入学手続きをした学生が取られることは生じている」と言っていた。「ただ、そのための対抗措置などは採っていない」とのことだった。また、その語り口からは、本件を現在の非常に喫緊で重大な問題とは認識していないようだった。

今回、これらの人々との、まさにパイプラインが出来たことは非常に有益だった。今後、調べても分からないことをこれらの人々に相談することができる。これがまさに対面で参加したことの最大のメリットであった。

## 11. test-optional 化の動きについて

米国での大学進学のための共通学力テストは SAT と ACT である。この共通テストの成績には、意図的・技術的に形成されたテスト受験学力が含まれると認識されている。NACAC(2008)もアドミッションにおける共通テストの利用に関する委員会を立ち上げ、その報告を行っている。松井(2009)によれば、その報告では、まず(1)統一テストを必要とするかどうかは各大学がアドミッション・ポリシーとの関連で決定すべきであるとしている。次に、(2)テストの準備とテスト情報へのアクセスで、高校生の間に格差があることを理解し、考慮に入れるべきであり、研究では、SAT の旧 1600 点スケールで、20～30 点は受験のための準備によって得点される傾向が知られているとしている。テストの準備として最終的には基礎的な知識と能力が重要ではあるが、質問形式、試験の実施方法、また生徒の学習上のスキル、アチーブメント、そしてテストとの慣れ、などの要因が点数にどのように影響するのか、しっかりと調査し、情報を得て共有し、評価する必要があるとしている。

これに対して日本の高校では、極端な言い方をすれば、3年かけて(中高一貫校では6年かけて)この「テストの準備」つまり受験学力形成を行っており、それを大学も評価している。したがって、23～30/1600 ではなく、もっと多くの、評価すべきでないものに基づいて入学者選抜を行っていると考えることができる。

このような背景により、以前から、選抜性の高い大学で、共通テストの弊害を認識し test-optional とするケースが増えていて、たとえば全米3位にランクされるシカゴ大も 2018 年 6 月に test-optional にした。それに加えて、さらに 2 つの理由から、test-optional にする大学が急激に増えている。

ひとつは社会的背景である。共通テストの得点は SES(Socio Economic Status)に大きな影響を受けるから、これを必須とする大学入学者選抜は社会的公正や社会正義に反するという主張が、近年非常に強くなされるようになってきた。これをめぐるカリフォルニア大学システムの動きについて詳細な報告を行っている船守(2020,2021)の解説を要約すれば次の通りである。

---

<sup>50</sup> その大学の中でも優秀な学生を集めて形成されるエリートコミュニティ。

カリフォルニア大学では、入学判定における標準テストの点数利用が違法であると主張する市民団体からの訴訟に対応して、2020 年 5 月に、2021 年度入学の学生から 5 年をかけて段階的に test-optional にする発表したが、2021 年度と 2022 年度についてはキャンパス(カリフォルニア大学システムの 10 校)ごとの判断とした結果、2021 年度入学については 10 校のうち 3 校が test optional とした。しかしその後、カリフォルニア州の上位裁判所が 2020 年 8 月に、そして州控訴裁判所が 10 月に、共通テストの点数を入学判定に利用してはならないという判決をカリフォルニア大学に対して出した。しかしカリフォルニア大学は、10 校の各キャンパスが入学判断の自由を持つべきであるとして、この判決に不服を示し、上訴も含めた対応方策を検討するとしている。しかしながら大きな流れとしてはカリフォルニア大学も test-optional に向かっている。

このように、これは現在の米国の大学入学者選抜にとって非常に大きな課題となっている。そのため、今回の 184 の教育セッションのうち 7 つのセッションで test-optional を取り上げている(セッションのタイトルに test-optional を含むのは 3 つだが、タイトルには含まなくても趣旨説明文に test-optional を含むセッションが 4 つある)。

しかし test-optional 校は増え続けたとは言っても、2019 年までには 1,050/2,300 校に達していたに過ぎない。それに急速に拍車をかけたのが新型コロナウイルス感染症によるパンデミックである。今回の教育セッション D12. The Future of ACT/SAT-Optional and Test-Blind/Score-Free Admission のコーディネータ Robert Schaeffer 氏(Executive Director・The National Center for Fair & Open Testing(略称 FairTest))のスライドによると、これによって 2022 年には、test-optional 校は 1,820/2,278 校にまで増えている。

そして少なくとも 1,650/2,278 校が、パンデミック終息後もこの方針を続けると表明しているとのことである。このことについては、パンデミックによって test-optional にした大学が、test-optional でも入学者選拔ができるという実感を持ち始めたためだと考えることもできるかもしれない。

しかしそれだけではなく、実際、test-optional にすることのメリットは、大学側にも出願者側にもいくつもある。たとえば今回の発表では、共通テストを受ける必要がなくなることで、高校生が遠くまで運転して試験を受けに行く危険を犯す必要がなくなるということが上げられていたが、こういったことは日本人にはまず想像できないことだと思う。アメリカでは多くの州で 16 歳で自動車運転免許証が取得でき、中には 14 歳のところもある。そのため自分の運転する車で通学する高校生もいる。アメリカの都市は広く分散しているので、小都市に居住する高校生で自分の町では共通テストが受けられない場合、遠路を運転してテストを受けに行くことがあり、その距離は何百キロにも及ぶ可能性がある<sup>51</sup>。日本でも、新型コロナウイルス感染症によって、毎日洗濯できない制服着用を義務とせず、いくらで

---

<sup>51</sup> 筆者はこのことで自身の過去のある経験を思い出した。筆者は 1991-1992 年にカナダ、オンタリオ州のトロント大学の客員研究員としてトロントに居住した。このとき、日本で発行された国際運転免許証は一定期間以降使えなくなると知り、現地であらたに免許を取得することになった。試験は自分の車を使って路上で行うのだが、その時にはすでに車を購入して所有していたので問題はなかった。しかしトロント市内ではすぐに試験の受けられるところはなく、同じオンタリオ州内の別の市に、トロントから近い順に手当たり次第に電話をかけた。その結果やっと、トロントの東北東に位置するピーターボロウ Peterborough という町で試験を受けられることになり、そこへ車を運転して行って受験し、合格して免許を交付された。しかしその後しばらくしてから、なんの気なしにその距離を確認してみる

も洗濯できる私服での通学を認めていた学校が多く、その際には女子もスラックスを着用していて、スラックスでの通学や学校生活にメリットが多かったことから<sup>52</sup>、コロナ後も女子が制服でスラックスを着用できるようにする変化が日本中で起きている。このように、新型コロナウイルス感染症によって仕方無く継続を中止したことが、潜在的な問題の解決につながったことから、コロナ後も前の状況に復帰させずに継続されるという現象は他にもある。test-optional に関してもそのような背景から、今後も広がっていく可能性がある。このような点について、日本との対比を行いながら注意深く観測していく必要があると考えている。

## 12. ダイレクト・アドミット direct admit について

### (1)ダイレクト・アドミットとは何か

なお、今回の教育セッションへの参加では、これまで筆者が認識していなかった新たな動向を知ることになった。それが「ダイレクト・アドミット／ダイレクト・アドミット・プレースメント／ダイレクト・アドミッション direct admit/direct admit placement/direct admission」である。

米国の大学はそもそも、リベラルアーツ・カレッジなら1学年全体として、また総合大学でも、体育や音楽などの専門別に募集をする学部の入学生を除いて、やはり1学年全体として College of Arts and Science の学生として「まるっと」合格させる。そして専門を決めるのは、3年次である。つまり米国大学の一般のアドミッション(入学許可)は、専攻を前提としないものである。

それに対して、通常なら3年次に決定する専攻を大学入学許可を出す時点で決めてしまい、場合によってはそれに従って1年次から専門の勉強をさせる試みを開始している大学がある。これがダイレクト・アドミットである。その後の調査で、これを実施している大学はまだそれほど多くはないが、それぞれの大学で少しずつ異なった方法でこれが行われていることが分かってきた。

ところで上記の test-optional 化の動きは、すくなくとも大学入学共通テストを必ず受験させてその結果を利用することになっている日本の国公立大学受験とは、逆の方向性を有しているのに対して、このダイレクト・アドミットは、むしろ日本の大学進学に近い方向性を有しているため、日本の大学入学制度を基準にして見れば、この2つはまったく反対方向に進んでいる2つの動向であるように見える。その点で、これに関心を持ち、参加中に種々調べたうえ、帰国後もインターネットでの調査を行うとともに、今回の参加で知り合うことのできた NACAC 関係者に対するメールを通した聴き取りなどを継続している。この動向について知ることができたのは今回の調査の予期しなかった貴重な副産物である。そこで最後に、これについて簡単に紹介する。

---

と、トロントからピーターボロウまでの距離は、なんと名古屋から京都までの距離とほぼ同じであることが分かった。今回、米国の小さな街に住む高校生も、共通テストを受けるためにこれくらいの距離を車で往復することは当たり前なのだろうと思い、それはたしかに大変なことだと感じた次第である。

<sup>52</sup> スカートを比べてスラックスはあらゆる点で動きやすいというメリットがあるし、LGBTQIA+の生徒にとっても適している。

## (2) ダイレクト・アドミットに関する今回のセッション

筆者がダイレクト・アドミットを知ったのは、次の教育セッションである。

### E03. 大学入学者選抜におけるダイレクトアドミットプログラムの詳細視 A Closer Look at Direct-Admit Programs in College Admission

- Andrew Borst: Director of Undergraduate Admissions・University of Illinois at Urbana-Champaign
- Keri Risic: Executive Director of Admissions・University of Minnesota-Twin Cities
- Mitch Warren: Director of Admissions・Purdue University
- Phillip Trout: College Counselor・Minnetonka High School

このセッションのスピーカーは、ダイレクト・アドミットを実施しているイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校、ミネソタ大学ツイン・シティ校、パデュー大学の3大学のアドミッション・オフィスの責任者3人と、ダイレクト・アドミットに高校生を送り出している高校側のカレッジ・カウンセラーである。

このセッションではダイレクト・アドミットのねらいやメリット、そしてダイレクト・アドミットを受けないことのメリットなどについても論じられた。

その後の調査で、高校生が大学学部から直接に入学許可を受けるダイレクト・アドミットには、次のようないくつかの異なるものがあることが分かった。

#### 1. 学部入学者に対して学部や専攻への直接の入学許可を出すケース

- 1.1 看護学部など専門性の高い学部への入学許可を出すケース<sup>53</sup>
- 1.2 美術・音楽などの特定のスキルを要する専攻への入学許可を出すケース(音楽では入学時にオーディションがある)
- 1.3 それ以外に大学の方針としてダイレクトアドミット専攻(Direct Admit Major)を増やしているケース(ペンシルバニア州立大学など)

しかしこれ以外に、次のように大学院あるいは専門職大学院が、通常とは異なって専門職大学院入学共通テストや学部を経ないで入学許可を与えることもダイレクト・アドミットと呼ばれていることが分かった。

#### 2. 学部卒業者に専門職大学院入学共通テストを課さずに専門職大学院への入学許可を出すケース

- 2.1 学部卒で受験する法科大学院入学共通テストLSAT(Law School Admission Test)を課さずに法科大学院への入学許可を出すケース(イリノイ大学ブルーミントン校など)

---

<sup>53</sup> 看護学専攻はダイレクト・アドミットの先駆的存在であるようで、比較的多くの大学がこれを実施している。次のページには、それぞれ50ほどと100を超えるダイレクト・アドミットのNursing Schoolのリストが掲載されており、どちらのリストにも入学に必要なGPAとSAT/ACTの得点が示されている。

<https://www.collegetransitions.com/dataverse/direct-admit-nursing-programs>

<https://sites.google.com/site/directadmitnursing/list>

### 3. 通常は大学学部卒業によって学士号を得て入学する専門職大学院への入学許可を、高校卒業後、学部を経ないで(あるいは学部入学と同時に)出すケース

#### 3.1 高校生に学部卒を要件とせずメディカル・スクールへの入学許可を与えるケース(ミズーリ大学、ピッツバーグ大学、マイアミ大学、ボストン大学など少数)

このうち 3.1 は 1.1-1.3 と同様に高校生に対するアドミッションであるが、これは高校から専門職大学院への直接の入学であって、上述のような高校から大学学部への入学において直接に専攻を許可される日本に近いあり方ではないので、以下では 1.1-1.3 について記す。

まず出願時期だが、ダイレクト・アドミットは、おもに ED (Early Decision) の出願者に対して出される。また、ダイレクト・アドミットの場合も、一般に出願はあくまでその大学に対して行い、その専攻に対して行うわけではない。その出願者の中から、大学と専攻の主体性によって、特定の専攻に適した能力を有していると考えられる出願者を選んで、その専攻に 3 年次から所属することを入学時に許可する。そのため、あくまでダイレクト・アプリケーション(出願)ではなく、ダイレクト・アドミット(入学許可)と呼ばれている。

出願者は、その時点でそれを受け入れても良いが、たとえその時点で 3 年生から、たとえば建築学を専攻して卒業後は建築関係の仕事をしたいと考えていても、ひょっとすると 1-2 年でいろいろ学んだ結果、建築とは別の専攻を選ぶかもしれないと考えて、そのダイレクト・アドミットを断ることもできる。そうすることは多様で豊かな可能性を残し、1-2 年生での勉強を将来のキャリア形成に生かそうとするものであるから、大学によって否定的に受け止められることはない。また、その時点で断っても、その専攻の定員がダイレクト・アドミットだけで埋まってしまうわけではないので、3 年次からその専攻に進む可能性を閉ざしてしまう訳ではない。

このような点で、これはもちろん、学部、学科、専攻等を決めて出願する日本の出願とは異なる枠組であると言える。しかしこのダイレクト・アドミットで何が起きているのかを注視していくことは、米国の通常の入学者選抜と異なるフレームワークのメリットとデメリットを調査し検討することであって、その視点から日本で一般的な専攻別の出願と合格の枠組のメリットとデメリットと見ていくことができるのではないかと考えている。そのためにも、今後さらに、このダイレクト・アドミットについて調査していきたいと考えている。

## 13. おわりに

本稿では、NACAC Conference 2022 の紹介とそこで筆者が得たものの一端を紹介した。

米国の大学入学者選抜は、日本とはまったく異なるパラダイムで行われているし、その前提として、米国の大学自体が日本とはまったく異なるパラダイムで成立しているため、日本の高大接続の問題を検討するのにはほとんど役に立たないという考えもたしかにある。

しかし米国の大学入学者選抜には、日本が学ぶべき多くの点がある。たとえば米国の大学入学者選抜の基底には、社会的公正や社会正義の追求があることが、今回のたくさんの教育セッションのテーマからも読み取れるが、それらは日本ではほとんど考慮に入られていない。それが最も明

確に表れた象徴的出来事が、先の大学入試改革における英語外部テストの導入の見送りそして断念につながった文部科学大臣の「身の丈」発言である。大学入学者選抜が社会的公正を基盤として検討されるべきだという当たり前の考えがあれば、あのような発言が出て来るはずがない。

また、NACAC 倫理綱領の変更に見られるような、学生の獲得を大学による自由競争とみてこれを自由化すべきと考えるかそう考えるべきでないかというような問題、そして test-optional 化の動きが共通テストの得点への社会経済的背景だけでなく、コストをかけた得点獲得技術の向上の影響などを原因としていることにも、日本が学ぶべき点が多いと考えている。

今後さらにこのような調査を進め、日本の大学入学者選抜のあり方を見直すための多様で柔軟な視点を確立していきたいと考えている。

なお本研究の一部は、科学研究費補助金基盤(C)「ポスト高大接続改革を見据え『高大接続型学力』の特質と形成環境を解明する質的研究 2020-2022」20K02512 によるものである。

## 文 献

- Benjamin L. Castleman, Lindsey C. Page, Ashley L. Snowdon(2013) SDP Summer Melt Handbook: A Guide to Investigating and Responding to Summer Melt. *Center for Education Policy Research*. Harvard University
- Dent, Jr., Harry (2015) *The Demographic Cliff: How to Survive and Prosper During the Great Deflation Ahead*. PORTFOLIO
- Hoxby, Caroline and Avery, Christopher(2013) *The Missing “One-Offs:” The Hidden Supply of High-Achieving, Low Income Students*, The Brookings Institution
- National Association for College Admission Counseling(2008) *Report of the Commission on the Use of Standardized Tests in Undergraduate Admission*, Arlington, VA, September 2008
- Adams, Susan (2013) 25 Colleges With the Best Return on Investment. *Forbs*. May 20, 2013,05:23pm EDT
- Otani, Takashi(2022) Japan’s University Entrance Examination Reform in Deadlock : Why Were the Planned Changes Postponed in One of the Most Revolutionary and Comprehensive Education Reforms Since World War II. *Bulletin of Center for Higher Education Transitions (CHET)*. 7. 82-92
- Ravipati, Sri(2017) Using AI Chatbots to Freeze ‘Summer Melt’ in Higher Ed. *Campus Technology*. <https://campustechnology.com/articles/2017/03/07/using-ai-chatbots-to-freeze-summer-melt-in-higher-ed.aspx>(2020. 3.14 閲覧)
- 大谷 尚(2018)「高大接続型選抜を担うアドミッションオフィサー養成プログラムの構築に関する研究」に関する調査報告：2. 2017 大学入学者選抜に関する全米大会への参加報告. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属高大接続研究センター紀要.2/3.20-27
- 大谷 尚・依田理恵子(2018) 高大接続型選抜を担うアドミッションオフィサー養成プログラムの構築に関する研究」に関する調査報告：1. アドミッション・オフィサー養成プログラムの構築に

- 関する調査報告:アメリカの大学のアドミッション部門とアドミッションズ・オフィサーに関する調査報告. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属高大接続研究センター紀要.2/3.3-19
- 大谷 尚(2019a) 公開講演会「高大を接続する-高校と大学の教師の役割-」: 高校と大学とが対話的・協調的に実施する北米の大学入学者選抜: アドミッションオフィサーとカレッジカウンセラーの職務の調査を通して. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属高大接続研究センター紀要.4.7-30
- 大谷 尚(2019b) 米国の大学進学独立カウンセラー協会の年次会合 HECA Conference 2018 への参加報告とそれにもとづく米国大学入学者選抜についてのいくつかの検討. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属高大接続研究センター紀要.4.60-78
- 大谷 尚(2020) アドミッション・オフィサー養成プログラムの構築に関する調査報告:「AACRAO (American Association of Collegiate Registrars and Admissions Officers)による SEM(Strategic Enrollment Management)年次カンファレンスへの参加報告と戦略的エンロールメント・マネジメントについて」 名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属高大接続研究センター紀要.5.5-25 II.
- 大谷 尚(2021) アメリカの大学の入学者選抜に今後大きな変化が起きるか?: 米国大学の統一的な募集・出願・合否判定・入学勧誘・入学手続きに関する専門職団体 NACAC の「倫理及び専門職的実践規範」の変更. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属高大接続研究センター紀要 6.59-64
- 大谷 尚(2021) 高大接続改革の問題と今後必要な研究に関する試論:ポスト高大接続改革を見据え「高大接続型学力」の特質とその形成過程・形成環境を解明する質的研究の必要性 名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属高大接続研究センター紀要 6.65-76
- 公正取引委員会(2001) 資格者団体の活動に関する独占禁止法上の考え方.  
<https://www.jftc.go.jp/dk/guideline/unyoukijun/shikakusha.html>
- 公正取引委員会(2021)アップル・インクに対する独占禁止法違反被疑事件の処理について.  
<https://www.jftc.go.jp/houdou/pressrelease/2021/sep/210902.html>
- 船守美穂(2020) コロナ下の米国大学(5):標準テスト SAT と ACT の壊滅か?.国立情報学研究所オープンサイエンス基盤研究センター. <https://rcos.nii.ac.jp/miho/2020/08/20200827/>
- 船守美穂(2021) コロナ下の米国大学(6):大学出願における標準テストの利用縮小.国立情報学研究所オープンサイエンス基盤研究センター.  
<https://rcos.nii.ac.jp/miho/2021/02/20210227/>
- 松井範惇(2009) アメリカの大学アドミッションとアドミッション・オフィサーの新しい課題.大学評価・学位研究.10